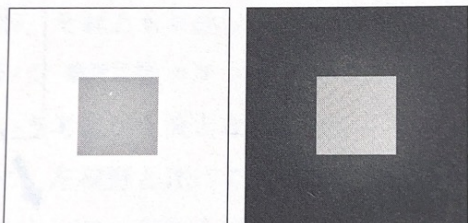


# 色のカテゴリーライズ

## 色の知覚は曖昧

色の知覚は生後4ヶ月ごろから可能であると言われていたますが、実際は大人のように鮮明でないため、粗く、色の変化の境目もぼかない状態です。特に周囲の光(照明)によっても左右されてしまいます。



実験: 明るさの対比

## 色カテゴリーの構成

光の波長の違いによって作り出される色を、赤や緑といったカテゴリーによる境界がはっきりとした異なる色へと区別していきます。

これは国や分化によっても異なります。例えば韓国では青には2種類あると言われており、欧米と比べ日本では、青と緑の境界が曖昧であるとも言われています。

## 言語能力との関係性

成人が色のカテゴリーを判断する際には、左視野と比べ右視野における反応が強く見られます。

また、同時に言語野周囲の活動が確認されています。

しかしながら、幼児では左視野が優位に反応するため、発達の過程で脳活動が変化しており、色カテゴリーは言語発達と関係性があると推察されています。

## 知覚から認知へ

色の知覚は生後4ヶ月程度で可能ではあるが、知覚された情報を、記憶や言語等にて照合し、「何」かを認識できなければ、色という概念が形成されているかを確認することができません。

## アセスメント/アプローチ

### ～色の知覚～

- ・知覚しやすい色を経験させる 青/緑/赤

### ～色の違い、同形色の知覚～

- ・知覚しやすい色から好みの色を選ぶ 2色から
- ・色分けおもちゃやカードにて同じ色を組み合わせる
- ・少しずつ色の種類を増やし区別を促す

### ～色のカテゴリーライズと認知～

色の認知の過程にあるお子様は、言語も含め他情報知覚の認知も可能な状態といえます。

例えば好きなものであれば認知している。

例：りんごを認知している→赤いりんご

- ・色を認知可能な物でフィードバック
- ・色を言葉でフィードバック

様々な支援内容の中で、対象のお子様のすでに認知できている何かを活用し、色や言語と繋げていきます。



## 色弱との見分け

色弱保有者(軽度～重度)は日本人男性の5%、女性の0.2%であると推察されています。

軽度の色弱の場合は、多少の色の違いはあるが、カテゴリーに区別できない程度に同色と知覚してしまいます。例:黄色/黄緑(同じ黄色) ピンク/水色 等

しかしながら、完全に同じ色でないことが多いため、

よく観察するよう促し、多少の色の違いを把握していきましょう。